

学校園教育推進サポート事業 報告書

学 番	1317	学校名	有明台小学校	校長名	大矢 隆	作成者名	大矢 隆
学校教育推進サポート担当者名			佐藤 加津江			電 話	266-7176

1 実践のテーマ

スタートカリキュラムと「個別最適な学び」の連携

2 テーマ設定の理由

不登校児童・生徒数の増加が大きな課題となっている。その原因は多岐にわたり一概に特定の要因を挙げることは難しいとされているが、多様な背景や特性をもつ児童が、学校生活に適応しづらく、学びにくさや不安等から孤立感や疎外感を抱くことが、問題の一因と考えられている。

こうした点を踏まえると、新潟市教育振興基本計画の基本方針Ⅱにおいてその方向性が示されているとおり、今後学校が、多様化する子どもたちを前提として、「いかにDiversity(多様性)を認め、Inclusion(包摂)を目指していくのか」、さらにそれを「どのようなカリキュラムを通して具現していくのか」といった視点は、ますます重要になってくる。

当校では、学校教育ビジョンの重点項目として、「ダイバーシティ&インクルージョン」と「カリキュラム・マネジメント」を一体的に進める教育活動に取り組んできた。一例を挙げれば、スタートカリキュラムの抜本的な見直しである。約15もの園から進学してきた多様な背景をもつ児童が、安心して登校し、みんなで遊んだり活動したりできることを目指した取組の結果、確かな成果を上げることができた。

この成果を踏まえ、本プロジェクトでは、スタートカリキュラムの考え方をさらに発展させ、個別最適な学びとして、一人ひとりの児童の学びにくさを解消し、その成長を最大限に引き出す環境を創出する。

3 実践内容

(1) 円滑な移行

スタートカリキュラムの一層の見直しによる、幼児期に培われた力を小学校の学習に繋げ、スムーズな移行を支援する取組

(2) 個別最適化

一人ひとりの発達段階や「読み・書き・話す・聞く」等における学びにくさに合わせた多様な学び方(アプリやタブレット端末の活用を含む)や教材を提供し学習効果を最大化する環境を構築する取組

(3) 主体的な学びの促進

児童がこれまでの学びや経験を振り返る場(教師のフィードバックを含む)を設定し、自分に合った学び方を選択するなど、次の学びや活動に生かす力を育成する取組

(4) 教師の専門性の向上

個別最適な学びに係る教員の理解を深め、実践力を高める取組

4 実践計画

実施時期	実施内容(研修会、先進校視察、授業公開 等)
4月～5月	・スタートカリキュラムの実施、実践公開 ・「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」に関する職員研修
6月上旬	・「読み・書き・話す・聞く」等における学びにくさについての児童アンケート実施(流暢性調査:早稲田大学 高橋麻衣子先生監修)
6月20日	・先進校視察(埼玉 戸田東小学校)

8月 1日	・学びにくさに合わせた多様な学び方に係る職員研修会 I (講師：早稲田大学 高橋麻衣子先生来校)
9月～	・流暢性調査の結果から、協働ベースの授業における個別最適化に関する授業開始
11月 4日	・学びにくさに合わせた多様な学び方に係る授業視察及び指導 (講師：早稲田大学 高橋麻衣子先生来校)
12月 22日	・学びにくさに合わせた多様な学び方に係る授業公開及び職員研修会 II (講師：早稲田大学 高橋麻衣子先生、特別支援教育課 渡邊指導主事来校)
1月～	・プロジェクトのまとめ、リーフレット公開

講師の高橋麻衣子先生との演習の様子



5 成果

(1) 検証

① 児童・保護者対象の独自アンケートにより、定量的評価を行う

自己調整学習に関する主たる項目「難しいことでも見直しをし、次の学習につなげようとしているか」の肯定的評価（4段階評価の「4」及び「3」の合計）は**95%**に達しており、本取組の有効性が示唆された。一方で、最高評価の「4」を選択した子どもは**59%**にとどまっている。なお、同じ項目の保護者の肯定的評価は84%（うち評価4は34%）、教職員の肯定的評価70%（うち評価4は50%）であった。さらに、これらの評価を補うものとして、関連する新潟市学習・生活アンケートの10項目を取り上げて、自校前年度及び市平均と比較した。項目により若干差があるものの、取組の成果が数値として表れていることがうかがえた。

② 独自アンケートの記述分析や抽出児童等の変容の見取りにより、定性的評価を行う

学級担任による見取り（記述分析及び授業中の見取り）の結果、選択型学習による支援で成果が見られた児童の割合は、**86%**（要支援児童29人中25人に肯定的な変容）であった。

以上の評価から、現時点では、「自ら学び方を調整し、困難を乗り越えようとする主体性」を育みつつある途上段階であると捉えている。

(2) まとめ

本年度は、「スタートカリキュラムと『個別最適な学び』の連携」をテーマに掲げ、多様性を包摂するカリキュラム・マネジメントを推進した。スタートカリキュラムの更なる見直しにより、入学当初の「安心感」と「学校生活への円滑な移行」を実現した。その基盤の上に、早稲田大学の高橋麻衣子先生監修による流暢性調査の結果を活用し、「読み・書き・話す・聞く」等における学びにくさの個別具体的な実態を把握した。この実態に基づき、学習課題は全員で共有しながらも、「誰と学ぶか」「何を使って学ぶか」を児童自身が決定する、「選択型学習」を推進してきた。さらに、タブレット端末の活用など、多様な教材から一人ひとりの特性に合った「学びの道具」を、自ら選べる環境を整えてきた。この「個別最適な学び」の環境構築により、児童に確かな成果が確認された。また、教職員においても、実態把握に基づく個別支援のプロセスを全校で共有したことにより、教職員一人ひとりの「個別最適な学び」に対する専門性が向上し、組織的な指導力の強化につながった。



選択型学習（フレキシブル・グループング）

次年度は、多様な学びの選択肢を「提供」する段階から、児童一人ひとりが自分に合った学び方を自ら選択する「最適化」の質を追求するフェーズへと進める。自ら困難をしなやかに乗り越え、誰もが「自分らしく学べる、真にインクルーシブな学校づくり」を加速させ、本市における教育モデルの構築を目指していく。